第二章　玉鬘の物語　玉鬘と柏木との新関係

［第一段　柏木、内大臣の使者として玉鬘を訪問］

まことの御はらからの君たちは（尚侍君とは実の御兄弟である内大臣家の子息たちは）、え寄り来ず（まだ血縁関係の公言を憚られたので、六条院に寄り付くことはせず）、「宮仕へのほどの御後見を（出仕の際に御所でお世話しよう）」と、おのおの心もとなくぞ思ひける（それぞれその日を待ち遠しくも思っていました）。

頭中将（頭の中将である内大臣家の長男は）、心を尽くしわびしことは（熱心に求婚したお手紙が）、かき絶えにたるを（すっかり途絶えたのを）、「うちつけなりける御心かな（現金な御心変わりだこと）」と、人びとはをかしがるに（女房たちは可笑しがっていたが）、殿の御使にておはしたり（内大臣殿の御使者としてお見えになりました）。

なほもて出でず（未だに血縁を表ざたに出さず）、忍びやかに御消息なども聞こえ交はしたまひければ（隠し事のように女房を裏へ呼んで父の手紙を君に渡しなさって）、月の明かき夜（この十五夜近くの夜に）、桂の蔭に隠れてものしたまへり（桂の幹の蔭に隠れて藤中将は立っていらっしゃいました）。見聞き入るべくもあらざりしを（以前はとても対面適わなかったが）、名残なく南の御簾の前に据ゑたてまつる（今は打って変わって尚侍君は中将君を南表の縁側にお通し申し上げます）。

みづから聞こえたまはむことはしも（それでも直答なさるのは）、なほつつましければ（やはり気が引けたので）、宰相の君して応へ聞こえたまふ（君は宰相の君を間に立ててお応え申しなさいます）。

「なにがしらを選びてたてまつりたまへるは（父が使用人では無しに私を遣いに選び為されたのは）、人伝てならぬ御消息にこそはべらめ（人伝てでは無い御伝言が在ってこそと存じます）。かくもの遠くては（このように遠くては）、いかが聞こえさすべからむ（どうしてお伝え申せましょうか）。みづからこそ（わたしなど）、数にもはべらねど（物の数にも入りませんが）、絶えぬ*たとひもはべなるは（血縁は切っても切れないと言うではありませんか）。いかにぞや（何とも）、古代のことなれど（古風な言い方ですが）、頼もしくぞ思ひたまへける（今ではそれが頼もしくも存じます）」　*「たとひ」は＜喩え、ことわざ、言い草、物の言い方＞。

とて、ものしと思ひたまへり（中将は人を介すのを邪魔にお思いでした）。

「げに（私も）、年ごろの積もりも取り添へて（年来の積もる話も含めて）、聞こえまほしけれど（お話し申し上げたいのですが）、日ごろあやしく悩ましくはべれば（このところどうも体調が優れませんので）、起き上がりなどもえしはべらでなむ（起き上がるのも難儀しています）。かくまでとがめたまふも（そんなに強く仰られますと）、なかなか疎々しき心地なむしはべりける（ますます近付けない気が致します）」

と、いとまめだちて聞こえ出だしたまへり（尚侍君は至って堅苦しくお応え申しなさいました）。

「悩ましく思さるらむ御几帳のもとをば（ご病気で横になっていらっしゃる側の御几帳に是非お寄りして）、許させたまふまじくや（お見舞いさせて頂きたいものですが）。*よしよし（分かりました）。げに（こうして無理に）、聞こえさするも（申し上げるというのも）、心地なかりけり（気が利かないことです）」　*「よしよし」は注に＜『集成』は「私を嫌っていらっしゃるのに、と暗に恨む気持」と注す。＞とある。「聞こえさす」は＜申し上げる、お耳に入れる＞。「る」は意志の助動詞の終止形で＜～をするということ＞を表す。「ここちなし」は＜分別が無い、配慮が無い＞。

とて、大臣の御消息ども忍びやかに聞こえたまふ用意など（中将が内大臣のご伝言の数々を小声で申しなさる気配りなどは）、人には劣りたまはず（源中将に劣ること無く）、いとめやすし（とても上品です）。

［第二段　柏木、玉鬘と和歌を詠み交す］

「参りたまはむほどの案内（出仕なさる時の日程や）、詳しきさまもえ聞かぬを（詳しい段取りを聞いていませんので）、うちうちにのたまはむなむよからむ（内々にお知らせ下さると助かります）。何ごとも人目に憚りて（大臣はとにかく人目につくので）、え参り来ず（とても此方に参上できず）、聞こえぬことをなむ（直接お話できないことを）、なかなかいぶせく思したる（何とも不自由にお思いです）」

など（などと中将は内大臣の御伝言を）、語りきこえたまふついでに（お話し申しなさるついでに）、

「いでや（いやはや）、*をこがましきことも（滅多なことも）、えぞ聞こえさせぬや（申せませんね）。*いづ方につけても（男としても弟としても）、*あはれをば御覧じ過ぐすべくやはありける（あなたが私の親愛の情を見逃しなさって良い筈は無いと）、いよいよ恨めしさも添ひはべるかな（ますます恨めしさも増しております）。　*「をこがましきこと」は懸想文をさす。と注にある。「をこがまし」は＜愚かしい、差し出がましい＞。人の失態を非難する、または自分の失態を恥じる言い方。　*「いづ方」は＜懸想人としてまた弟として、の意。＞と注にある。　*「あはれ」は＜話者の情＞。「御覧じ過ぐすべし」は尚侍君が＜見過ごしなさっても良い＞。「や」は反語表現で、「やはありける」は＜ある筈が無い＞。

まづは（先ずは）、今宵などの御もてなしよ（今の私への御処遇です）。*北面だつ方に召し入れて（このように客間ではなく、台所に招き入れてもらい）、*君達こそめざましくも思し召さめ（あなたの方は内情が知られて困るようにお思いかもしれませんが）、下仕へなどやうの人びととだに（下女のような人たちとでさえ）、うち語らはばや（親しく語らいたいものです）。また（普通他では）かかるやうはあらじかし（こういうことはないでしょう）。さまざまにめづらしき世なりかし（私たちは何かと不思議な間柄ですね）」　*「きたおもてだつかた」は注に＜「南表」に対して「北面」は奥向の部屋、私的な部屋。正客扱いに対しての不満。＞とある。身内に対して他人行儀な応対でなく、打ち解けて付き合って欲しい、ということらしいが、私は当時の習慣を知らないから、こういう言い方は唐突に思えるが、逆にこういう台所周りの御勝手口が当時の第一級の貴族家にあっても身内の親しい語らいの場なのかと、妙に納得で

きるような不思議な一文だ。　*「きんだち」は＜貴公子＞で、「だち」は＜複数＞でもあり＜そういう身分の人＞でもあるようで、此処では＜貴君＞と尚侍君に呼びかけているらしい。

　と、うち傾きつつ(首を傾けつつ)、恨み続けたるもをかしければ(恨み言を言っているのも可笑しいので)、かくなむと聞こゆ(尚侍の君は宰相の君をして、こう申し上げます)。

　「げに(実のところ)、人聞きを(人の話に)、うちつけなるやうにやと憚りはべるほどに(急な変わりようだと噂立つのを嫌いまして)、年ごろの*埋れいたさをも(長年のうっ積をも)、*あきらめはべらぬは(晴らせないのは)、いと*なかなかなること多くなむ(とても残念です)」　*「うもれいたし」は＜晴れ晴れしない、気が沈む、控え目すぎる＞と古語辞典にある。　*「あきらむ」は＜見定める、判別する、心配を無くす、気が晴れる＞と古語辞典にある。　*「なかなかなる」は注に＜「なかなかなること」とは、辛いことの意。係助詞「なむ」の下に「はべる」などの語句が省略。＞とある。が、与謝野訳文の＜残念＞の方が「なかなか」のどっちつかずの語感に合いそうなので、此方に従いたい。

　と、ただすくよかに聞こえなしたまふに(ただ表面上のことだけで情味を見せずにお応え申しなさるので)、まばゆくて(中将は自分だけが気負って居るようで気恥ずかしくなって)、よろづおしこめたり(愚痴めいた話はもう止めました)。

　「妹背山深き道をば尋ねずて、緒絶の橋に踏み迷ひける　(和歌 30-03)

　「実の姉とも知らないで、変な手紙を出しました　(意訳 30-03)

*注に＜柏木から玉鬘への贈歌。「妹背山」は大和の歌枕。「緒絶の橋」は陸奥の歌枕。「妹背」に姉弟の意。「絶え」に難渋する意をこめ、「踏み」に「文」を掛ける。『完訳』は「遠隔の歌枕が、稀有な体験のとまどいを表象」と注す。＞とある。「妹背山(いもせやま)」は＜奈良県中部、吉野川を挟んで相対する右岸の妹山（いもやま）（260 メートル）と左岸の背山（せやま）（272 メートル）の総称。吉野町に属す。両山は吉野川の侵食によって切り離されたと考えられ、背は夫、妹は妻を意味し、浄瑠璃（じょうるり）、歌舞伎（かぶき）の『妹背山婦女庭訓（おんなていきん）』で知られる。＞と Yahoo!百科にある。ただ、「妹背山」が＜大和の歌枕＞になったのは古今集以降で、それ以前の＜万葉の歌枕＞としては和歌山県伊都郡かつらぎ町大字高田は JR 西笠田駅の北側の城山・鉢伏山の「兄山(せのやま)二峰」を示していたという指摘が、いくつかの万葉 Web サイトの旅歩きルポの記事にある。が、それでもこの物語で想定されているのは芳野だろうし、兄山からは程半ばで和歌浦に抜ける紀ノ川は吉野川の下流でもある。また前に、尚侍君への手紙の取次ぎを「吉野の滝を堰かむよりも難きこと」と言って女房たちが諸侯へ断ったという記事も此処に繋がる。尚侍君は初瀬寺の縁者、大和の人、なのだろうか。「深き道」は＜男女の仲＞と＜血縁関係＞との両方を意味する意味深で絶妙の言葉遣いで、七夕の天の川よろしく吉野川を隔てる＜悲運＞とも「尋ねずて(知らないで)」という言い方になっている。「緒絶の橋(をだえのはし)」は宮城県大崎市古川の緒絶川に掛かる橋とのことで、確かに「道を尋ねず」としても大和から宮城野の先とは随分と遠く、「踏み迷ひける」の文字通りだ。また、「緒絶の橋」は＜脈の尽きた伝手＞という言い方だから「文迷ひける(手紙を出し間違えた)」の洒落言葉に成っている。なお、緒絶川は今は小さな川だが、元は大きな川の本流が流れていた場所で、川が筋を変えた為に干上がって水無し川となり、それが涙も涸れるに通じて「緒絶の橋」が＜悲恋＞を意味する詞にもなったらしい。歌筋は意訳のようなことだろうが、このように歌枕を使って教養高い言い回しをすると尤もらしくて、間違えですら説得力があるように見えてボロが隠れる、のかも知れない。

よ(という訳ですよ)」

と恨むるも(と恨んでみても)、*人やりならず(中将が自らしたことなのでした)。　*「人遣り」は＜他人の強要＞。

「惑ひける道をば知らず妹背山、たどたどしくぞ誰も踏み見し」(和歌 30-04)

「迷い道とは知らないで、誰も踏み見る妹背山」(意訳 30-04)

*「迷い道とも気付かないで山道は誰でも危ない足取りになります」という一般論の言い方で答えた尚侍君の返歌。建前からしても、自分は姉弟という間柄を知っていた、とは言えない。が、「誰でも」見た文なのだから、「私も」見ました、とは言っている。「たどたどし」は＜おぼつかない、確かでない、危なっかしい＞であり、手紙の中身が＜良く分からない＞でもある。見ていないなどと空惚けたことは言えないが、文の中身には触れないで、中将を傷付けまいとする気配りはしているのだろう。ただ、中将は今さら何を言われても取り消せない事実なので、諦める他に仕方の無いことで、特に源氏殿に対する恨みは残るだろう。

(と尚侍君の返歌をお伝え申してから宰相君が、)「*いづ方のゆゑとなむ(中将殿のお手紙がどういう趣旨なのか)、え思し分かざめりし(姫にはお分かりにならなかったようです)。何ごとも(姫は何事も)、わりなきまで(困るくらい)、おほかたの世を憚らせたまふめれば(引っ込み思案でいらっしゃるようなので)、え聞こえさせたまはぬになむ(お返事なさらなかったのです)。おのづからかくのみもはべらじ(今後は当然このようなことばかりでは無いでしょう)」　*「いづ方のゆゑ」は注に＜以下「かくのみもはべらじ」まで、宰相の君の詞。「いづかた」は柏木の「いづ方につけても」の言葉を受けて返した言い方。＞とある。下に「聞こゆるも」と敬語表現に成っていないので、女房の言葉なのだろうが、確かに分かり難いし、実際にも「御返し」などの言葉無しに行き成り返歌を言伝てて、「かくありて」などの間も置かずに女房が自分の感想を言うことなど無い筈で、余りに当たり前の事の次第だから省筆したのなら、私はこの文とは感性が違いすぎる。補語で明示しないと私には読めない。与謝野訳文には明示がある。「いづ方のゆゑと」は中将の言い方を受ければ＜どういう素性の間柄か←男としてか弟としてか＞という意味に成るが、それを洒落言葉にして＜手紙がどういう趣旨なのか＞とはぐらかしているのだろう。

と聞こゆるも(と申し上げるのも)、さることなれば(尤もなので)、

「よし(分かりました)、長居しはべらむも(長居致しますのも)、すさまじきほどなり(場違いなようです)。やうやう労積もりてこそは(だんだんお役に立ってから)、*かことをも(愚痴でも、お聞き願いたいものです)」　*「すさまじ」は＜不調和で面白く無い、興ざめだ＞とある。此処での「不調和」は、立場の定まらない同士で居心地が悪いのと、不慣れな者同士で話題が続かない、場が持たないのとで＜場違い＞。　*「かことをも」は下に＜聞こえはべらじ＞などが省略されているのだろう。

とて、立ちたまふ(お帰りになります)。

月隈なくさし上がりて(月が明るく上がって)、空のけしきも艶なるに(空の景色も人を恋路に誘うような夜に)、いとあてやかにきよげなる容貌して(とても上品な整った顔立ちで)、御直衣

の姿(略礼装姿の中将は)、好ましくはなやかにて(嫌味が無く華やかで)、いとをかし(とても見応えがあります)。

宰相中将のけはひありさまには(源中将の雰囲気や姿には)、え並びたまはねど(及びなさらないが)、これもをかしかめるは(こちらも優れた人であるのは)、「いかでかかる御仲らひなりけむ(どうしてこうも選ばれた御方々揃いなのでしょう)」と、若き人びとは(若い女房たちは)、例の(例によって興奮の余り)、さるまじきことをも取り立ててめであへり(目に付いた全てを取り立てて褒め合っていました)。